

---

# 循環魔術の継承者 双極魔術第二集

青朱白玄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

循環魔術の継承者 双極魔術第二集

### 【Nコード】

N4708W

### 【作者名】

青朱白玄

### 【あらすじ】

魔法とはマナを消費して呪文の効果を発揮するもの。この常識を最初に言葉にしたのは誰だったのだろうか？ここにひとりの達人が登場する。達人は長きに渡る鍛錬の末、常識を乗り越えた。彼が自分を魔法使いとすら認識していなかったことを、君は信じられるかね？彼は長いこと、自分はナイフ使いだと信じてきたし、実際呪文などひとつも唱えられない。それでも達人の技は魔術に他ならなかったんだ。究極魔術とさえ、呼べる魔術だよ。

注意：この作品は、本文、前書き、後書き、タイトルなどを予告な

く差し替えることがあります。ご了承ください。ブログにて当作品の関連情報を提供しております。よろしければそちらもご覧ください。品質と技術向上のため、厳しいご指摘でも感想にいただけますと幸いです。

## ・ 独自用語の注釈 (前書き)

いよいよ第二集に突入です。

シリーズ物ですので前作が存在しますが、たぶんこちらより読みにくいですし、単独でも読めるようにしておきたいので、説明を入れておこうかと存じます。

書くにつれ説明が必要な用語が増えると思いますので、適宜更新いたします。

もしこちらをご覧になって、前作も読んでみたい、と思われましたらどうぞ、シリーズ第一集「双極魔術の迷い人」もお読みになってください。

お楽しみいただけましたら幸い、ついでに評価などもいただければなお幸いです。

なお、この注釈は読まずに飛ばしても一向に問題ありません。

ご注意：

・この作品は、本文、前書き、後書き、タイトルなどを予告なく差し替えることがあります。ご了承ください。

・ブログにて当シリーズの関連情報(小ネタ)を提供しております。よろしければそちらもご覧ください。

<http://ameblo.jp/scops-owl/>

・品質と技術向上のため、厳しいご指摘でも感想にいただけますと嬉しく思います。

## ・独自用語の注釈

魔法……マナを操って不思議を起こす技術の総称。魔術（杖魔法）、虹魔法（精霊魔法）、聖魔法、黒魔法など。

マナ……魔法の燃料にあたるエネルギー。生物・無生物自身が持っているマナと、環境（空間、大地）が持っているマナがある。通常は魔法を使う場合、自分自身のマナを消費する。

呪文……火球の呪文のように、個別の魔法を指して使う。

魔法使い……系統を問わず、魔法を使う者。

静心応魔……魔法使いの能力。呪文や道具に頼らずマナを感じ取る。パーティはこれを信じがたいレベルで使いこなす。

詠唱……魔法を使うために（通常は）必要な呪文文章を唱える行為。魔術にはさまざまな詠唱技術がある。

無詠唱……魔術の詠唱技術のひとつで、声に出す詠唱なしで呪文を使う技術。使用するマナは通常より増え、呪文の精度と威力が落ちる。無詠唱で呪文を使うにはその呪文に極度の熟練を要する。ヴァンは無詠唱を多用する。

魔術／魔術師……最も人為的な魔法の系統。またその使い手。

虹魔法／精霊魔法／虹使い……最も原始的な魔法の系統とその使い手。精霊を呼び出し、その力を呪文として使う。

反発……魔法に抗うこと。成功すれば呪文の効果を免れたり、弱めたりできる。反発できない呪文も存在する。

身体賦活……魔術の呪文。身体能力を向上させる。ヴァンは闇商人と長期的な戦いをするにあたり、この系統の最上級の呪文を使った。十日間有効にしたため、本作序盤でも有効。

遺跡潜り……財宝などを求めて、古代の遺跡を漁る者たち/職業。戦士、業師、各種魔法使いなどで構成される三から六人程度のグループで行動することが多い。

業師……遺跡潜りで必要になる、畏の対処や隠密行動、独自の戦闘術などに通じる多技能者。口が悪いものは技術の類似性から「盗賊」と呼んだりする。

偽竜……闇商人ビダーの使用した、竜に似た大型の兵器級魔法生物。邪悪さと狡猾さを兼ね備え、戦闘能力も高くヴァンを苦しめた。（一見ヴァンが圧勝したように思えるのは、ヴァンが最初から全力で攻め続けたため）

ビダー/ラドイッツ……前作でヴァンが戦った闇商人の元締め。

ヘイン……山賊の頭領をしていた超戦士。パーティを含む少年少女たちを奴隷として売ろうとしていた。

ニーズ（街）……中央に運河が流れる街。商業が盛ん。

守護獣……ヴァンがパーティを守らせるために造った魔法生物。普段は腕輪の中にいて、パーティが攻撃されそうになると現れる。狼型。

(前作からの登場人物)

ヴァン……本作の主人公。魔術師。十七歳。

ルーシャノルーシャリエ……ヴァンと共に旅をする少女。業師。十五歳。

パティ……ヴァンによって魔術の才能を見出された少女。十二歳。魔術の修行中。親に売られて山賊のもとにいた。

ホッグ……ヘイン率いる山賊の一員だった髭面の小男。お腹が出ている。賭けに負けてルーシャの言いなりになっている。

適宜更新します。

## 一・ちよつと遺跡まで

太陽には言葉もなかった。

それはそうだろう。雲が空を分厚く覆い尽くしてしまい、大泣きしているのだ。しかも泣いている理由というのが、王の退位を嘆いているというのだから意味が分からない。

太陽を天空の玉座から放逐したのは、他でもない雲自身なのに。

\*\*\*

雲の涙が落ちる音は酒場の雑音をかき消すまでになっていたので、ヴァンは声を張り上げざるを得なかった。

黒髪に同色の瞳の青年である。動きやすいように、長めの髪を後ろでひとまとめに括っている。着ているのは魔術師のローブだ。

「こんな天気でも馬車は出るのかい？」

赤ら顔の御者はやはり怒鳴るような声で答えた。

「客次第だ。出さなきゃ飯が食べねえし、乗る奴がいねえのに出してもやつぱり食べなくなる」

「今日はどうなんだ？」

「金のなさそうな娘っ子がひとり、乗ることになってる。そいつが来るなら出るが、来なきゃ料金が倍になる」

「到着日程は遅れないか？ 本当に五日で着くのか？」

「そこまで保証はできんよ。マーヴァルの都に着きさえすりゃ、おいらの仕事は終わりだ」

\*\*\*

「先生、できるようになったよ」

酒場の片隅の席で、パティは小声で呪文を唱え、様々な色の光を次々とワンドの先に灯しては消してみせた。もちろん遊びなどではなく、れっきとした魔術の訓練だ。

パティは魔術の非凡な才能を見出された、金髪の少女である。

肩までのやや癖のある髪を揺らし、好奇心の強さを物語るかのような大きめの瞳を輝かせて、呪文を唱え続ける。

魔術学校に入学させるために王都マーヴァルまで連れて行くつもりなのだが、それまでに少しでも教えておこうと、ヴァンが臨時の先生になっているのであった。

「さすがに早いな。呪文を覚えるところからそこまで、半日もかからんか。まあ、今日は色をもっと細かく変える練習に専念しよう。そうそう、駅馬車は何があっても出るらしい」

これに答えたのは癖のない長い銀髪の娘だった。

「馬がかわいそう……」

「ルーシャ、馬はともかくお前が心配なんだが……」

「大丈夫だってば。酔ってたのは昔の話。今は平気」

「ならいいんだが……」

「姐さん、酔い止めならありやすぜ？ おいらも実は、乗り物に弱くて……」

「ホッグ、あたしは本当に平気なの。それより早く、表か裏か当てよ」

ホッグと呼ばれたお腹の出た髭面の小男は、慌てて裏を宣言した。今はルーシャのお付きみtainなことをしているが、少し前までは

山賊の一味にいた男だ。誰も信じないだろうが……。

酒場の扉が開いて、限界まで膨らんだ背負袋に潰されそうな少女が現れた。黒い髪を短めに刈り揃えている、大人しそうな娘だった。よろけながら入ってきて、待ち合いの一角に近づいてくる。

「すみません、遅くなりました……」

「ちっ、料金は通常通りか。お客さん方、乗っとくれ！」

やがて駅馬車は視界が悪い中、二丁目の街を出た。

目指すはマーヴアル王国の同名の王都。

五月二十六日の午後のことであった。

\*\*\*

ふと考えことから我に帰ったヴァンは、遅れてきた女の子が明かりの呪文の練習をしているパーティを、ときおり盗み見ているのに気づいた。どうやら話しかけていいか迷っているらしい。

「パーティ、ちょっと休まないか？」

「うん……けっこう疲れるね」

「あの……こんにちは」

案の定、女の子が話しかけてきた。パーティは、自分が話しかけられていると気づくまで、少し時間がかかった。

「え？ あ、こんにちは」

「ごめんなさい、さっきから見えました。すごいですね！」

「そう、なのかな？ ありがとう」

照れくさそうに笑う。

「あたしパーティ」

「エレンです。パーティさんは魔法学校の学生さんですよ？ 何年生ですか？」

「ううん、これから入学するの。だよ、先生？」

「そうだな。オレはヴァン。よろしくな」

「ヴァンさんは、どこかの学校の先生なんですか？」

「そういうわけじゃない。パーティが入学するまでに少しでも成績の底上げをしてやろうと、臨時の先生をやってるだけだ。エレンは学生なのか？」

「いえ、私もこの秋に入学するんです。でも寮の部屋が早く空いたから、引越して来いって学長さんからお手紙が届いて。うち、貧乏だから両親に笑顔で追い出されちゃいました」

言ってエレンは笑った。

「ねえねえ、エレンって何歳？ あたし十二歳！」

「じゃあパーティと同じ年ですね」

「だったらもつと普通に話そうよ。エレンの話し方、大人みたい」

「あ、うん。分かった。パーティはどこに入学するの？ 同じ学校だったらいいな」

「先生が一番いいところに入れてくれるって」

「それなら、あたしと同じテミスレア魔法学園か、王立魔法学院だね。テミスレアに来ない？ きつと楽しいよ」

「いいんじゃないか？ さっそく友達もできたんだし」

パーティが何か言う前に答えを出すヴァン。

「やったあー！」

「ずいぶん嬉しそうだな」

「だって先生、あたし同い年の友達って初めてだもん。村には子供、少なかったし」

「着いたら学長さんに、相部屋になれないか聞いてみるね。パーティが嫌じゃなかったらだけど……気が早いかな？」

「ううん、嫌じゃないよ！」

「あ、でも八月下旬にならないと普通の人は寮に住めないはずだから……」

「それくらいだったら交渉してみるさ。材料はあるしな」

「材料？」

「呪文のために通常の四分の一しかマナを使わない、ってパーティの才能を見せりゃ、大抵のことは断れないだろ。よそに持ってかれたら泣くのは向こうだ。ところでエレン、君は学長さんとどういう関係があるんだ？」

「お婆ちゃんが学長さんと仲が良かったらしくて……」

エレンは祖母に魔術の才を見出され、学長に頼んで入学することになったらしい。

家が貧しいので、学費が払えないと彼女の両親が泣き言を漏らすと、それも交渉して奨学生扱いにさせたというのだからやるものがある。

その後も三人はいろいろな話をして盛り上がった。

ルーシヤはホッグと銀貨を使った賭けをしてしきりに笑っていた。

ホッグは対照的に泣き顔。

どうせ、いかさまをされているのだろう。

\*\*\*

天気のおかげで時刻は分かりにくかったが、完全な闇が訪れる前に小さな宿場町に到着した。

ヴァンは御者から指定された安宿にふたつ部屋を借りた。ついでにエレンも呼び、今は全員が同じ部屋にいる。

「考えたんだが、やはり馬車は途中で降りることにした」「どうして?」

訊き返したのはルーシャだ。遊戯札でホッグと遊んでいる。

「偽竜だよ。どうしても気になってな。北西の遺跡群の要塞遺跡から見つかったらしいんだが、調べてみようと思う」

偽竜とは魔法で作られた怪物で、その姿はドラゴンに似ており、知性と邪悪さを兼ね備えた、生きる兵器だった。

ヴァンは一昨日この魔物を死闘の果てに討ったばかりだ。

強力な守りの護符がなかったらヴァンの方が先に死んでいた。何しろ、致命傷を肩代わりする護符が壊れたのだから間違いない。

「何が引つかかっているの?」

「持ち帰ったつて遺跡潜りたちの評判を聞いたら、素人よりいくらかまして程度の連中だと分かった。とてもじゃないが、偽竜みたいなものを自力で入手できるとは思えない。だが誰かの助けを借りたわけでもなく、確かに自分たちだけで持って帰っている。それを可能にする何かがあったんだ」

「その何かを突き止めたいわけね」

「ああ。だから、予定通りなら明後日の昼前に降りる。そうだ、パティはまだマナが余ってるな?」

「うん。明かりの呪文だとかんばってもほとんど減らないよ」

「まあ、マナの量を数値化するとき単位扱いされるくらい消費が少ないからな。今から壁に呪文吸収の処理をするから、光の矢の練習だ」

「え？ パティって攻撃呪文も使えるの？」

エレンが驚きの声を上げた。

「最初に教えた。光の矢は呪文を操る練習にちょうどいいからな。軌道を変化させる練習をすればいい。その軌道変化のさせ方だが…

…」

こつを説明していく。エレンも興味津々といった様子だった。

「まあ、パティならすぐ覚えるだろう。とりあえずは三種類、前もって設定した軌道で飛ばす、飛ばしてから軌道を変更する、飛ばしからの軌道を三回曲げる、これらを少しの変化でいいから覚えてもらう。その前に、光の矢の速度を落として使う練習からだ。エレンもやってみたそうだな？ ルーシャ、光の矢が二本になっても平気か？」

「ゆっくり飛んでくるんでしょ？ 二十本でも平気じゃないかな」

「あたしも邪魔していいんですか？」

「ああ。やってみな。面白いぜ」

ふたりとも筋は良かった。

パティはエレンという競争相手がいることで、いつも以上に集中しているように見えた。結局マナが尽きる前に課題の最終段階まで達成してしまった。

「パティ、よく頑張ったな。明日の夜にはもっと変化させる練習をしてみよう。エレンも大したもんだ。基礎の呪文はひと通り使えるんじゃないか？」

「はい。でもこういう訓練は初めてでした。正直な使い方ばかりで

……」

「まあ、普通はそうだろうな。ふたりともマナがほとんど残ってないから、後は……エレン、パティに読み書きを教えてやってくれないか？」

「え？ パティって読み書きできないんですか？ じゃあどうやって呪文を？」

「丸暗記させたただだよ。文字をゆっくり読むことはできるようになったが、書く方じゃいくつかすぐには思い出せない字がある。今日は調子がいいからな。そっちも一気に進むんじゃないか？」

「先生の意地悪！」

平和に夜は更けていった。

\*\*\*

地上からは見えない星たちに慰められたとみえて、翌朝には雲は大泣きをやめ、地に落ちる涙もだいぶ勢いを減じていた。

駅馬車も順調に進み、次の宿場町へは雲が赤くなってからほどなく到着した。ここでもやはり安宿を指定された。宿となんらかの約束でもあるのかも知れないとヴァンは思った。

昨日と同じような一幕の中で、ついにパティはすべての文字を滞りなく書けるようになった。綴りで間違えることはあるものの、これは大した進歩だった。

ただ、残念なことにヴァンはその頃、御者と話をしていた。

\*\*\*

「途中で降るせ？」

「立ち寄りたいた場所があつてな。料金は全額ちゃんと払う。文句はないだろう?」

「ふん……どこで降りるつて?」

「街道沿いの次の村か町がいい」

「降りるのは何人だ?」

「四人」

「分かった。好きにしな」

「ありがとうございます。これで一杯飲つてくれ」

金貨を一枚置いてヴァンは席を立った。

\*\*\*

部屋に戻ったヴァンは、色とりどりの魔法の明かりがたくさん灯つているのを見て面食らった。

「何してるんだ?」

「パーティが文字を書けるようになったお祝いに、明かりの呪文でおめでとうつて書いてたの。色もつけられたらよかつたんだけど……そういうえはあれつてどうやるんですか?」

「マナの属性を変化させるんだ。呪文文章は一文字もいじらない」

「マナの属性?」

「エレン、マナを生身で感じ取る訓練はしたか?」

「はい。静心応魔ですよね? 修行の最初くらいにちよつとしました」

「マナに色がついているように感じられたことはなかつたか?」

「そういえばそんなこともあつたかも……」

「感情が昂ぶつてる人間のマナは、属性が表に出やすい。色となつてな。今のパーティのマナを感じてみな」

「……少し青いよつな……」

「青は水のマナの色だ。赤は火、黄が地、白が風。属性を出していないマナは実は薄い緑だ。無のマナとも言っ」

「先生も水、ルーシャさんは風、エレンとホッグさんは地だね」

「え、パーティ、そこまで分かるの？ だって色が……」

「パーティはこれが得意なんだ。下手な呪文よりも信頼できるくらいにな。感情が昂ってなくてもマナの色はちゃんとあるから見分けられる……あの御者、火だな」

「すごい……」

「で、マナの属性は個人に備わった資質だから変えようがないが、マナの一部を別の属性に変えることはできる。もしできなかつたら自分の属性以外の属性呪文は、絶対に使えなくなっちゃうからな。そうやって変えたマナを使って明かりを唱えると光に色がつくわけだ」

「先生、属性呪文って？」

「火の呪文、氷の呪文みたいに、元素と関係が深い呪文だ。攻撃用の呪文に多い。例えば火球爆発とか。自分と同じ属性の呪文は扱いやすい。たぶん威力も増すはずだ」

「あの……ヴァンさん、王都に着くまで私の先生もしてもらえませんか？」

「すまん。オレたちは明日、馬車を降りるんだ。寄って行きたい所があつてな」

「そうでしたね……どこへ行かれるんですたっけ？」

「ちよつと遺跡まで、な」

「ま、いつか

雲の気持ちはだいぶ落ち着いてきたが、泣くのはまだやめなかった。気にかけてもらえるのが嬉しかったからだ。

\*\*\*

馬車は水たまりを踏んで跳ねさせながら村に入った。ひとつきりであるう食堂の前に停まる。四頭の馬たちはいなくなき元気もなく震えている。

「ほい降りた降りたあ、少し早いが昼飯にしてくれえ。おっと、あんたたちはここで別れだったな」

「ああ。世話になった」

「……金額に間違いなし、と。ニーズに来るときはまた乗ってくれ」

エレンは心細げな声を出した。

「パティ……」

そしてパティの右手を両手で包みこむ。パティは慰めるように返した。

「エレン、すぐに追いつくから。だから寮の話はお願いね」

「うん。きつとだよ」

「なあ、悪いがこの手紙を学長さんに渡しといてくれるか？」

「分かりました。じゃあ、少しの間さよならです」

エレンは手を離すと小さく振ってみせた。パティが同じようにし

て応えた。ヴァンたちも思い思いの仕草で別れを告げた。

「さて、ここからは何時間か歩きだ。疲れたら休むから言ってくれ」

\*\*\*

村から西方向には岩石ばかりの荒地が広がっていて、四人は岩に手をついたりして転ばないように進む必要があった。濡れて滑りやすくなっている岩はそれを余計に困難にし、パティとホツグは何度も転びかけてはヴァンたちに支えられて難を逃れていた。

やがて少しは平らな土の盆地に出ると、今度はぬかるみに足を取られないよう気をつけながら歩くことになった。さらに進むと白く霞む視界に少しづつ森が見えてきた。ヴァンは迷わず入っていく。

そうして休憩を挟みつつ歩くこと数時間、木々が消えたかと思うと古い石造りの廃墟群が見えてきた。廃墟といっても朽ちたり壊れたりといった箇所は少ない。古代の素朴な建築技術は魔法の併用もあり、簡単には形が崩れない建物を作ることに長けていたのだ。

この遺跡群の中に、目的の要塞跡がある。

進むにつれ、少しずつ建築物が密集し始める。このあたりはもう、古代の街の中と呼べるだろう。

そして霧雨に白む視界に城の朧げな影が見え始めた頃。

「ここだ。第四要塞遺跡……中に動くものがあるな。巨大昆虫の類か」

ここまで無言だったルーシャが疑問を投げかけた。

「ヴァン、四つの要塞跡とやらを見て思ったんだけどさ、本当にこれって要塞だったの？ 二階建ての守りが堅そうな施設がぽつんとあるだけで、胸壁みたいなものもないじゃない？」

「胸壁は魔法で作ってたんだよ。強力な結界。強力ではあっても耐久力は無限じゃないから、わざと結界を作り出す要塞は結界の外に置いた。攻められることになるが、防衛側も積極的に攻撃に回れるってわけだ」

「へえ」

「さて、疲れてなかったらさっさと入るぞ。中の危険はあらかた排除されてるらしいしな。パティ、明かりを頼む」

言ってワンドを取り出し、呪文を待つ。パティは完璧な発音で明かりの呪文を使い、十分な光量の白い光を先端に灯した。

\*\*\*

遺跡はさまざまな侵入者排除の仕掛けの痕跡が残る、迷路状の建築物になっていたが、やはり探索済みだけあって何の障害もなく奥まで辿りつけた。

途中一度だけ、羽根を広げた長さが約二メートルの巨大な蛾が近づいてきたが、ヴァンの氷の戒めの呪文で球状の氷に閉じ込められた。

羽ばたきをやめた羽虫は当然、落下する。幸いなことに氷塊は落下の衝撃で嫌な音を立ててひびだらけになり、中の様子は見えなくなった。

最奥の部屋は隠し部屋になっていたようで、そこに台座が三つ、大中小と並んでいた。

「ここに偽竜が置かれてたんだ……妙だな。強力な魔法の仕掛けが無力化されている。連中にできたとは思えない……仕掛けをいじったのは例の遺跡潜りじゃないな」

「どづいつこと?」

「遺跡潜りがここに入ったとき、魔法の守りはすでに働いていなかったんだ。誰かが偽竜をすぐにも取れる状態にしておいて、そのまま手も触れずに帰ったってことだ。しかし何のためにそんなことをする?」

ヴァンが考え込んでいると、ルーシャとパティが同時に何かに気づいたように身動きを止めた。注意を集中させている。  
やや遅れてそれに気づく。

「ん、どうした、ふたりとも?」

「ヴァン、誰かが助けを求めている。急ぎましょう」

「走って逃げてるよ。こっちに近づいてくる。追いかけてるのはふたり」

部屋を飛び出したルーシャの後を慌てて追う。ルーシャは鋭敏な聴力で異変を察知したようだが、パティはどうやら生身でマナを感じる技術。静心応魔を常に使い続けているようだった。

「先生、右の通路。こっちにまっすぐ近づいてくる」

パティの誘導に従って通路を進む。それにしても、静心応魔をここまでものにするとはヴァンも予想していなかった。

そして通路を抜けた部屋で、赤茶けた短めの髪の少女が息を乱して飛び込んできた。そのすぐ後から現れたのは二体の異形の人型生物……妖魔族だ。片方はその弱さで知られるゴブリン、もう片方は黒い全身鎧に身を包んでいるため正体が分からなかった。

「た、助けて! 殺される!」

ヴァンとルーシャは少女を通り過ぎて妖魔族と相対した。  
妖魔族の片割れ……金属鎧を全身にまとった男が片言で話しかけてきた。

「むすめ、わたし。いやなら、こるす」

「どっちも無理な相談だ。パティ、練習台にしていぞ」

ヴァンは手始めに雷球を使った。当然ながら無詠唱である。ヴァンは特別な理由がない限り、呪文は無詠唱で使用する。

妖魔族たちは一緒に球状の結界に閉じ込められ、次いで結界内に青白い火花が散り始め、火花はすぐに長く尾を引く雷となって暴れまわった。雷はどんどん数を増していき、やがて内部が何も見えないほどの青白い球体となる。それらが消えるのは唐突だった。軽装で弓を持っていたゴブリンの方は完全に焼け死んでいたのだが、鎧兜の方は……

「火傷ひとつないだと!？」

皮膚が露出している部分は兜の目の隙間くらいだったが、そこから見える範囲では火傷が見当たらなかった。ありえないはずだった。金属鎧の重さを思わせない速度でヴァンに肉薄し、斧を振り下ろしてくる。その斧を避けつつ、過剰加重の呪文で体と鎧の重さを激増させてやろうとした。

驚愕した。呪文が完全に無効化されたからだ。

(過剰加重は反発されてもある程度の効果を発揮する呪文……てことは、何か仕掛けがあるな……)

パティの光の矢が着弾しかけたとき、鎧の表面で呪文が空気に溶

けるように霧散するのが見えた。

(全知……魔法がかけられたときに起こる現象、範囲は鎧兜の妖魔)  
「知識取得に失敗。何らかの障害が発生。原因不明」  
(なに?)

その間にルーシャが鎧兜の背後に回りこみ、関節部分からナイフを刺そうとした。しかし鎧兜は絶え間なく動き続けて狙いを乱しつつ、ルーシャに斧の連撃を返してきた。

距離を取るしかないルーシャ。すると鎧兜は背を向けて遁走に移った。

パーティの三本同時の光の矢がその後姿に命中したが、またも完全に鎧で防がれたように見えた。魔法に鎧は効果がないのが普通なのに、だ。これではまるで逆だ。

「ありがとうございます。何とお礼を言ったらよいか……」

「みんなはここに居てくれ。今度は槍でやってみる。すぐ捕まえて戻ってくるさ。まだ身体賦活は有効なままだしな」

礼を言う少女を半ば無視して追撃に移ろうとするヴァンだったが、思いがけず強い力で腕を掴まれた。

掴んでいるのは逃げてきた少女だった。

「助けていただいておいて失礼ではありますが……関わらないでください。今のことは忘れて、速やかにここを出てください」

ヴァンは少女をいきなり抱き上げた。

「変更だ。全員で追う。パーティ、マナは感じ取れるか？」

「うん。少しゆっくりになって早足くらいで離れてくよ」

「分岐があつたら正しい方向を教えてください」

「ちよつと、私の話を聞いて……」

「聞くよ。だが、追いかけてながらだ」

すぐに揃って駆け出した。

「あなた、名前は？ ああ、オレはヴァン」

「ライチ……命が懸かっているんです。言うとおりにしてください」

「ライチ、あなた遺跡に住んでるのか？ とてもじゃないが遺跡潜りには見えない格好だ」

「……」

ライチの格好は村娘のそれに近い。ただ、革鎧と小剣で武装している点が違うが、それとてせいぜい護身用。それに

「マナの量から見て、魔法使いでもなさそうだしな」

「先生、まっすぐ。立ち止まっているよ。なんでだろ？」

「待っているのか？ 逃げておいて待つのは十中八九、罠だろうな。近づくのはオレひとりだ。みんなは声の届く距離で待っていてくれよ。ライチ、あなた何か知らないか？」

「……」

「黙るか。まあいいさ、聞く相手は他にもいる」

広めの部屋に出た。部屋の奥に鎧兜が見える。ヴァンはライチを降ろす。それから一気に距離を詰めつつワンドを一振りすると、それは二メートル強の槍に変じた。

槍を突き出そうとしたそのとき、壁についていた鎧兜の右腕がわずかに動いた。そこには可動式の取っ手があった。それが何かはすぐに分かった。部屋のほとんど全域の床が勢いをつけて回転しつつ急速に沈み込んで、落とし穴が現れたからだ。

悲鳴を上げるパーティとホッグ。部屋に数歩踏み入ったところで待っていたのだ。同じく落下中のルーシャは声を出さずヴァンに視線だけ送った。頷くと落下減速を通常詠唱して全員にかけた。

落ちる速度が緩む。上から悲鳴が聞こえてきた……距離を急速に縮めながら。今度は無詠唱で同じ呪文を、落ちてきたライチにかけた。

「ヴァン！ どうして降りるの？ 飛んで戻るんじゃないの？」

「下を見てみるよルーシャ」

かなりの深さ……いや、高さだった。ヴァンたちはもはや遺跡の建造物から出て、広い空間を落ちていた。地下の空洞だ。それが視認できるのは、まるで昼間の屋外のように明るいからだった。

遙か下には岩で円形に大きく囲われた領域があり、その中にはやはり石造りの多くの建物があつた。集落だ。

そしてそこでは今 殺し合いが行われていた。妖魔族らしき無数の群れが攻め込んでいる。対するは人間だが、数は半分以下。

「ヴァン！ どうしてゆっくりなの？ 飛んで助けに行かないの？」

「あのな……少しは状況を整理する時間が欲しいんだよ。少しでもいから。なあライチ、あの集落、お前さんのところかい？」

「……はい」

「この侵攻は初めてじゃないだろう？ 戦い慣れてる。倒すためじゃなく死なないための戦い方だ。これまでどうやって退けてきた？」

「……あなたたちには関係ないことですよ？」

「関係ないことに手出し口出しするからおせつかいって言われるんだよ」

「……祖父が敵の統率者を退ければ、兵士たちは逃げていくのが常です」

「……それらしき姿は見えないな。よし、ひとつ戦術級お見舞いしてやるか」

戦術級攻撃呪文とは、戦争で使うのを主眼においた、長射程、広範囲の攻撃呪文を指す。威力も高いが、マナも大量に消耗する。

「限定殺陣……対象は妖魔族のみ……」

ヴァンの詠唱に心えて目標地域が半球状の巨大結界に包まれる。

次の瞬間、結界内の地面からは無数の氷の槍と岩石が飛び出し、上からはやはり無数の炎の球と雷が降り注いだ。

それらは正確に人間を避けて妖魔族だけを殺傷していく。この呪文の最大の特徴は範囲内の攻撃する対象を条件によって限定できることにある。その種の戦術級呪文はいくつか存在したが、ヴァンはマナの消費量は大きいものの、四大すべての属性を使って攻撃するこの呪文だけを習得していた。

サファイアがまたひとつ灰になった。呪文が収まると残るのはほぼ人間だけ……のはずだったのだが

平然と動いている黒い影が複数あった。

「く！ 同じ鎧か……しかし、戦術級まで無効化するのか？」

巻き込んだ敵は百体強、そのうち二十六体もが何事もなかったかのように戦いを続行している。その身を覆っているのは見覚えのあり過ぎる黒い全身鎧……。

「……まずいな。雑魚を一掃したら鎧の連中が動きやすくなったらしい。オレはこれから連中のご真ん中に飛ぶ。一緒に来るのは誰だ？」

ルーシャとパーティが行くと言い出すと、ホッグとライチも続けて名乗り出た。

「ライチとホッグとパーティはひと塊でいること。パーティは直視できない強い明かりを一瞬だけ灯して敵の視界を奪うことだけしてくれ。ときどきでいい。みんなパーティのいる方は向くなよ！ ホッグはライチの護衛。パーティを狙ってきたら放っておけ。守護獣が出てかえって有利になる」

「へい！」

「はい！」

「ルーシャはオレの近くから離れないこと」

「あなたと違って、あたしならあいつらと戦えると思うけど？」

「じゃあなおさら一緒だ。オレの背中を守ってくれ」

「ま、いつか」

瞬間転移した先は当然村の広場。鎧姿の割合が増えてしまったところだった。

## 二・ありがとう

怒号、剣戟、咆哮、断末魔……

広場は謎の支援攻撃を受けて後、かえって戦況が悪化していた。

「後退、後退！ 鎧は相手にするな！」

「ちっ！ 魔法使いは散って周囲の応援に向かえ！」

犠牲者が少ないのは幸いだった。敵の絶対数が減ったことは必ずしも悪い方だけに働いてはいない。だが、時間の経過と共に悪化していくのは確実だった。

「偵察兵！ 敵の大將はまだ見つからんのか！？」

「まだ大きな動きを起こしていない。鎧の中に紛れているはずだが判別には時間がかかりそうだ！」

「急いでくれ！ ムゼツカ様が動いてくださらねば被害はいたずらに拡大する」

「報告！ いつの間にか戦場に入り込んでいた正体不明の四人組が援護を始めている！ そして理由は分からないが、ライチ様が一緒におられる！」

「ご無事だったか！ しかし、援護とはどういうことだ？」

\*\*\*

転移した位置が絶妙過ぎて、誰ひとりそこから動く必要がなかった。敵の注目を一斉に浴びたからだ。そして戦術級呪文を炸裂させた中心に、黒の鎧姿ばかりが集まってくる。

「ホッグ、あんたの二本の剣の片方をオレに出来ないか？ 試した

「いことがあるんだ」

「え？ は、はあ。いいですけど」

「そんじゃ、くれる方を構えてくれ。呪文をかける」

ホツグが予備の方の長剣を構えると、ヴァンは珍しいことに三秒もかけて何かの呪文を通常詠唱した。

「実験が成功ならそいつは一撃限りの大打撃を与える武器になる。大振りでも何でもいいから頭か胴体に当ててくれ」

ルーシャが口を挟む。

「何それ？ あたしのナイフにもかけてよ」

「一撃で壊れるぞ？ それに実験に使うには小さすぎるしな」

「……何の実験なのよ」

「パテイ、いいつて言うまで明かりは待ってくれ」

「はい！」

それ以上、話している余裕はなかった。総勢二十以上の全身鎧の妖魔族が押し寄せてきたからだ。体格が明らかに違う者も混ざっている。

ヴァンは槍を構えて待った。全知で敵味方の現在位置を脳裏に描き続けるつもりだったが、把握できるのは味方だけだった。静心邪魔に切り替える。こちらは正常に感知できた。ホツグより前にヴァンが乱戦に入った。

眼の前に来たのは二体の大柄な妖魔族で、ひとりには斧、ひとりには両手剣を持っている。全知で種類を調べる試みはやはり失敗した。

斧の方を突きで牽制すると、それを好機と見て剣が槍の柄を全力で叩き落としに来た。槍を一回転させて剣を避けるついでに手首関節の隙間を狙う。

普段なら無茶な試みだったが、闇商人と戦うために解放した最上級身体賦活の呪文が、極めて精密で力強い攻撃を可能にした。利き腕の関節を破壊されて剣が後退する。

同時にホッグの間に鎧が入った。ヴァンは自分とルーシャをかすかに光る結界で保護して、ホッグたちの様子を観察した。

「はふっ！」

独特の呼気と共にホッグは剣を横に振るった。鎧を過信した敵は弱そうなホッグの攻撃など目に入らないと言わんばかりに、自らの大槌を振りかぶった。

鎧の脇腹に剣が命中し あっさり折れた。

誰もが驚いた。ただひとり冷静なヴァンを除いて。半呼吸ほど間を置いて、折れた剣先が小さく爆ぜた。粉々になっている。同時に鎧の脇腹が巨人の一撃でも受けたかのように派手にひしゃげ、着用者も弾き飛ばされた。生きているとはとても思えない威力だった。

「な、な、な……」

言葉にならないホッグ。当然と言える反応だが

「ホッグ、剣を交換しな。うまくいった。ありがとうよ」

斧がヴァンの結界を二度、斬りつけた。ヴァンは向き直って結界を解除しようとしたが、その必要はなかった。

斧の妖魔が、体当たりで鎧を結界に当て、消してしまったからだ。

「む、気づくのが早いな。頭回るぞこいつら」

ヴァンはそのままの勢いで突っ込んでくる黒い鎧を、受け止める

ふりをして相手の力を誘導し、地面に頭から挨拶させた。ルーシャがその鎧の隙間から頭部を刺し、即座に絶命させた。

だが好調なのもここまでだった。

ヴァンの槍もルーシャのナイフも、今の戦いを見て警戒しだした敵の隙を突くことができなくなり、増援が増えていく中で体力だけをいたずらに磨耗させられ始めた。

ホッグは元よりさほど戦闘力が高くない上に警戒までされて、剣を叩かれて取り落としそうになっていた。

「パティ、頼む！」

炸裂する一瞬の強烈な光。

明かりの呪文……閃光と呼ぶにふさわしい効果が最も役に立った。鎧姿は一樣に目を瞑り、その隙について劣勢を覆すべく武器が踊り、三体の妖魔族が地に伏した。

しかしそれさえも対策を立てられる。パティが呪文を唱え始めると同時に俯き加減になり、直視しない戦法を取られたのだ。

パティを最重要標的と認識した長槍の鎧姿が、踏み出して武器を突き出した。しかしそれはパティに届かず、突如現れた金属質の獣の胸で滑り、獣は槍をまず噛み砕いてから持ち主に踊りかかった。ヴァンがパティを護らせるために造った守護獣だった。

白銀の狼を模した魔法生物は得難い増援だったが、劣勢を覆すほどのものでもない。

ヴァンは頃合いを計っていた……瞬間転移による逃げだ。敵を倒すのにかかる時間は増える一方、その倍の速度で疲労も蓄積していく。転移のために全員の居場所を確認したそのときだった

「先生！ あそこ！」

パーティが集落の広場を抜けたあたりを指した。妖魔族の侵攻はそこまで及んでいて、次々と牽制を放つてから逃げていく男たちの中……ひとりの痩せた初老の男が、鎧兜の顔からナイフを引き抜いていた。倒れる鎧姿。

見ればその男の移動したと思われる場所に、倒れている鎧がもうふたつあった。

「ムゼツカ様！」

若者のひとりがそう呼びかけて鎧姿の一体を指していた。その男  
ムゼツカは白髪混じりの茶色の短髪を掻きつつ、悠然たる足取りで示された敵に歩み寄った。

ヴァンは仲間と守護獣に落下減速をかけてから、四十メートルほど上空へ瞬間転移させた。敵も味方もはや戦いを止めて、ムゼツカとその相手の一挙手一投足に注意を集中していた。  
特等席で見せてもらうつもりだった。

「お前さんが今日の大將か」

ムゼツカは問いかけるでもなくそう言うと、一步だけ深く踏み込んだ。次の瞬間、信じられない急加速をして大將に肉薄していた。両の手のナイフが閃き、無造作にも思えるその斬撃が鎧を傷つけ始めた。

その速さは尋常ではなかった。腕が六本あるようにすら見えるほどの連続攻撃。だが、いかんせんその攻撃は軽く、鎧の表面に傷を増やしているだけに見えた。

大將は間合いを空けて連接棍を振り回そうとしていたが、ムゼツカは影のように付き纏い、至近の間合いを外させなかった。その間

も攻撃の手は少しも緩まない。あくまで鎧の表面に留まっていたが、傷が見る間に増えていった。

妖魔の大將は苦し紛れに足を振り上げるが、その蹴り足を取って振り上げを手伝うと、鎧姿が宙を舞った。全身鎧を着込んでいるとは思えぬ体捌きで宙返りをして足から着地した大將、だが着地の硬直を狙い、心臓の真上からナイフを深々と刺された。

幻惑の乱撃の最中、その場所だけ繰り返して斬りつけて、穴を開けていたのだ。血の跡を引いて抜かれるナイフ、倒れる鎧姿、湧き上がる歓声。

戦いはたったこれだけのやり取りで終わってしまった。

大將が敗れたと知るや、妖魔の軍勢は肅々と退却していった。

ヴァンは絶句していた。横目でルーシヤを見やる。

「……見た」

ルーシヤの短い拗ねたような反応にもすぐに言葉が出ない。

「……あれはヘインなみじゃねえのか？」

ヘインとはパティを売り飛ばそうとしていた山賊の首領だった男で、人間の限界を超えた戦士だった。ヴァンが辛くも心臓凍結の呪文で仕留めたが、それとて幾つもの偶然が呼んだ奇跡に近い。

「ヘインさんを知ってるんですか？」

「ライチ……知り合い、なのか？」

「祖父から名前だけ。しきりに、いつか殺すと。でもとても懐かしそうに」

ライチは微笑んでいた。

「ご覧になったあの人が、祖父のムゼツカです」

「パテイ、ちゃんと見てたか？」

「うん。先生、あれは何ていう魔法なの？」

これに驚いたのはルーシャとホッグだった。ルーシャは反論した。

「魔法なんて使わなかったでしょ？ あの人の、ずっとナイフだけで戦ってた」

「使ってたんだよ。マナが活性化や移動を目まぐるしく繰り返していた。たぶん魔術だろうな。そんな風にマナを扱うのは他の系統の魔法にない特徴だ……しかし解せないことがひとつある」

ヴァンはまたも視線を下に落とした。ゆっくり落下していたが、もう高さは二十メートル強ほどになっていた。そして、下から見上げる人々の注目も浴びていた。

「あたし分かったよ。あの人の、魔法使ってるのにマナが少しも減らなかつたよね？」

「それだ。詳しく聞かせて欲しいところだが……」

ライチに目を向ける。その意図は容易に読めたので彼女は答えた。

「命を助けていただきましたし、紹介くらいはしますよ」

「ありがとうございます」

ヴァンは呪文を制御して落下速度を早め、地上が近づいてからまた減速して着地した。

\*\*\*

犠牲者を悼む泣き声、慰めの言葉、運ばれていく遺体……。ヴァンは居心地の悪さを感じたが、今はそれどころではなかった。あのムゼツカとか言う達人と一刻も早く話をしたかった。

「ライチ、無事だったんだな！」

「ライチ様、その人たちは？」

思惑は外れ、たちまち人だかりに囲まれてしまった。

「ご心配をおかけしました。敵に追われていたところを、この方々に助けていただいたんです」

「それにしたって他所者を連れてくるとは……」

非難がましい声も上がった。ヴァンがそれに答える。

「オレたちはライチを追いかけた奴の畏でここに落とされたんだ。責めるべきはライチじゃない」

「あんたが隊長か？ 名前は？」

「まあ、この四人を隊と呼ぶならそんなところかな。ヴァン・ディールだ」

「ディール、来てくれ。長老からお言葉がある」

(お言葉、ね……)

他の四人もついて来ようとしたが

「ライチ様はムゼツカ様の元へ。安心させて差し上げてください」

「長老のところにいるって伝えてくれればいいだけでしょ」

「長老はそれをお望みではありません」

ヴァンは予想通りの言葉にうんざりしてきた。

「サムソン様ね？　なおさらあたしが行かないと。止めても無駄。力づくっていうならこの獣が暴れ出すけどいいの？」

パーティの守護獣を指す。無論、そんなものライチの出任せなのだが、信じる根拠も疑う根拠もなくては判断のしようもなかった。反応に満足すると、ヴァンを促して歩き始めた。

「あなた、かなりのおせっかい焼きだろう？」

「あなたに言われたくはないかな、ディールさん」

「ヴァンでいい。家名で呼ばれるのは苦手なんだ」

集落の人々は道を開けた。途中、パーティがヴァンに声をかけた。

「先生、この子いつまで出たままなの？」

「ああ、守護獣のしまい方を教えてなかったな。しばし休め、我が盾よ。これが合言葉だ」

パーティが復唱すると白銀の狼は光になって腕輪の真珠に吸い込まれた。パーティは真珠を撫でながら呟いた。

「守ってくれて、ありがとう」

### 三・待ってる

長老の家とやらは集落の最奥にあった。いや、正確には最奥の手前というべきか……というのも、さらに先には小高い岩山があり、その中へ通じる洞窟が大あくびをしたときのように口を開けているからだ。

ライチの後から長老の家に入ると、白髪の老人三人が炎の近くの敷物に座っていた。暖炉ではなく、部屋の中央の石床が軽く掘られていて、そこに火をくべてあるのだ。燃料の木の種類のせいも、煙が出たり激しく燃えたりはしていない。そして良い薫りが部屋中に広がっていた。香木なのだろうが、ヴァンの知識にはないものだった。

まず口を開いたのは、目付きの鋭い伸び放題の髭の老爺だった。

「ライチ、ここへは来ぬよう伝えさせたはずだが？」

「そう言われたらなおさら来ないわけにはいきません」

「サムソンよ、ライチより客人と話をしたいのじゃがよいかな？」

「何ゆえわざわざ伺いを立てる？ 好きにすればよいアベル」

アベルと呼ばれた温厚そうな老爺は、編みこんだ灰色の髭を触るのをやめて声をかけた。

「客人よ、座っておくれ。地上と違って椅子がないので、敷物の上じゃがの」

老魔術師は言いながら杖を振り、部屋の片隅に折り畳まれていた敷物が五つ、浮遊して石床の上に敷かれた。大人しく従う。

「勝手に名乗らせてもらう。オレはヴァン、こっちがルーシャでこ

「いつがホッグ、最後がパティだ」

「礼儀正しい若者じゃのう。儂はアベルじゃ」

「私はキ・ハ。キーハの方が呼びやすいからそう呼ぶ人が多いわ」

左に座っているのがキ・ハ、目尻の垂れた人が良さそうな老婆だった。植物や石を使った独特の装飾品を身に着けている。

「こっちの無愛想はサムソンよ」

「頼んどらんぞ、キ・ハ」

痺れを切らしてヴァンは尋ねた。

「話があると言われて来た。その話とやらを聞きたい」

答えたのはアベルではなく、またもサムソンだった。

「魔術師はお前だな？」

「そうだ」

「派手にやってくれたらしいな。おかげで四人死んだ。何か言うことは？」

「サムソン、責任のすべてが彼らにあるような言い方をするでない」「黙れアベル。今喋っているのは儂じゃ」

「あたしが代わりに話すわ。あなたじゃこじらせるばかり」

「頼んどらんぞ」

「では儂が頼もう。キーハ、話してくれ」

「ありがとうアベル。さて……」

キーハは温厚な笑みのまま続けた。

「大規模な魔術を使ったそうですね。知らなかったでしょうが、敵

の中には魔法が通じない者たちがいて、弱い兵が死に、その精鋭だけが残ったのです。突然、敵の前面が強いものだけになってしまったことに対処しきれなくて、聞いての通り、被害者が出ました」

「知らないこととはいえ、すまなかつた」

「素直ではないですか。責めるのはやめにしましょう」  
「待つて」

口を挟んだのはライチである。

「キー八様、ヴァンたちは善意で私たちの加勢をしてくれましたよ？ 非難ではなく、お礼を言うのが筋ではないでしょうか？」

「そうですね。ですが、戦況が悪い方へ傾いたのは事実。指摘しなければ遺族は恨みに思うことでしょう」

「ライチ、いいんだ。押しつけの善意で状況を悪化させたのは確かなんだ。ことを荒立てるつもりもない。咎められるなら甘んじて受ける。ただ……」

ヴァンは長老たちを見回した。

「ここに留まらせてもらいたい。同じ間違いはしないし、力を貸せることもある。せめてもの詫びをしたい」

完全に本心とは言い切れなかったが、偽ったわけでもなかった。と、そこへ初めて聞く声が響いた。

「ライチ！ 心配したぞ。助けてもらったそうだな？」

達人、ムゼツカであった。気配が感じられなかったので、ヴァンは少なからず動揺していた。

「ヴァン・デールにルーシャにホッグにパーティだったな。礼を言うぜ。ここに留まりたいってんならオレが面倒見るから安心しな」  
「ムゼツカ！ お前にそのような権限があると思ってか！ 思い上がりもはなはだしいぞ！」

「サムソン、オレは隠れ里の英雄様だぜ？ それにあんたらに任せたら、朝までかかるだろ」

「決まりね。あまり気は休まらないだろうけど、納得がいくまで逗留するといいわ」

「すまん」

「違うわ。そういつときは、ありがとう、と言つものよ」

「……ありがとう」

苦手な言葉を紡ぎだすと、キ・ハは柔和な笑みで頷いた。

\*\*\*

ムゼツカとライチの家は、村の広場と長老たちの家の中間にあった。他の家々と同じく石造りの素朴な建物だ。家の中はあまりに整頓されていて、まるでいつ引き払ってもいいようにしているようだ。と、ヴァンは感じた。

「んで、ここが客間だ。一応ふたつ作っておいてよかったぜ。それから手製の寝台。信じられるか？ ここの奴らは寝台も使わねえんだ。床に座るのは疲れるから、話をするときは寝台に腰掛けてしよ  
うぜ」

ムゼツカに促されるままに寝台に腰掛けた。あまり柔らかくはなかったが、座るにはかえって好都合だった。ヴァンが問いを投げる。

「ムゼツカさんも地上の生まれなんですね？」

「そういつこった。迷い込んだらなんか戦争してるから、手を貸したら英雄に祀り上げられちまってな。以来、ここが我が家だ」

「ねえお爺ちゃん、この人たち、ヘインさんを知ってるんだって」「本当か？ あいつ今何してんだ？ どこにいる？」

ライチが口を挟んだことで、話題にしたくなかったことを語らざるを得なくなり、ヴァンは頭を痛めた。

「山賊の頭領をしていました。ニーズの街の東側で。ええと……隠してもしょうがないので言ってしまう。オレが……殺しました」「……本当、なんだな？」「……はい」

空気が重くなるのを感じた。ヴァンはムゼツカと真正面から見つめ合っていた。目を逸らすのは失礼に当たると思いつつも、本心では視線を外したくて仕方なかった。ムゼツカの表情から感情は読み取れない。

と、思っていると、不意に破顔した。

「か〜〜！ この野郎！ あいつはオレが殺すはずだったのによお！ 畜生、老い先短い年寄りの楽しみかっさらいやがって！」

笑っていた。他の全員が啞然とする中で、ひとり笑いながら楽しそうに悪態をつくムゼツカ。一番先に適応したのはルーシャだった。ムゼツカに気楽な調子で尋ねる。

「ねえ、ヘインとはどういう知り合いだったの？」

「あいつかあ？ いけすかねえ奴だったぜ。まあ、昔馴染みの仲間ってことにしといてやるが。いつも澄ました面しやがってよお、それがまた年頃の娘たちには受けがいいんだから憎たらしいだろお？」

ひとしきり笑うと、ムゼツカは気にするなという素振りです。ヴァンに話しかけた。

「よく殺せたもんだ。大した奴だなおめえは。ますます気に入ったぜ。困った事があつたら何でも言いな。言うだけならただだからな！」

「ありがとうございます」

「畏まるなよヴァン、オレにそんな大げさな言葉遣いすんな。呼び方もムゼツカとか爺さんとかで構わねえよ」

「あの、ムゼツカさ……ムゼツカ、聞きたいことが……」

「おう、何でも聞きな」

「あなたの戦いを見ました」

「見てたな、空の上から」

「あの技……あの魔術は、誰に学んだんですか？」

「アベルの爺いと同じこと言いやがる。あれのどこが魔術なんだ？呪文のひとつも唱えてねえんだがよ」

「呪文を使うのに必ずしも詠唱は必要じゃありません。無詠唱という技術があります……けど、あなたの技術は恐らくそのさらに先の……」

「わーったわーった。あの技はな、自分で編み出した。十何年かけてな」

「自分で……？」

「最初は気休めくらいの効果しかなかったが、工夫してる内にどんどんいい感じになってった。ヴァン、オレの手を握ってみな」

「？」

不可解ながらも差し出された右手を握り締める。

「弱いだろ？」

「え？」

「オレは今、力の限り握り返してるんだ。笑っちゃうくらい弱いだろう？」

「……どうして？」

「体質って奴だ。生まれつき手足の指の力が弱い。赤ん坊より少しましって程度だ。こんな奴がある日、女友達に誘われました。ねえ、わたし遺跡潜りになることに決めたの。あなたもなっってくれるでしょ？ と来た！」

「……薬や魔法は？」

「飲んだ薬は数えきれないほど、回った神殿は実に三桁。同じ数だけ俺びの言葉を聞いた……いや、そんなことはねえか。でまあ、こんなオレにも遺跡潜りとしてできることを探したわけだ。手先が器用だからって業師の技を学ぶことにした。ところが戦闘術が含まれてたんだなあ。どんな腕利きも匙を投げたぜ。話にならんってな。何しろ短剣ひとつまともに持ってられねえんだ。だから、自力で鍛えるしかなかったんだよ」

片手をおずおずと上げてパティが口を挟んだ。

「あの……業師ってなに？」

「遺跡潜りは分かるな？ 遺跡潜りにひとりには必要って言われる、いろんな技術に通じた多技能者のことだ。鍵や罠の対処から偵察、軽業、隠密行動なんでもありだ。口の悪い奴は盗賊なんて呼びやがる」

「お爺ちゃん、あたしご飯にするけど、皆さんもう疲れちゃったんじゃない？ 休んでもらったら？」

「おお、そうだな。じゃあ続きを聞きたけりやまた今度、だ。飯ができたら教える。オレもちよつと横になってくらあ」

「ごめんね、年寄りには話が長いから……ご飯、作ってくるね」

ふたりが部屋を出た。ヴァンとルーシャはそれぞれ深刻そうな顔を  
をしている。やがてヴァンが口を開いた。

「ホッグ、パーティに読み書きの練習をさせててくれないか？ 少  
しルーシャと話したいんだ」

「へい！」

パーティは心配そうな表情を投げかけてから扉を閉めた。

「ルーシャ……」

「ヴァン、あたしに指図しないで」

「そんなつもりは……」

「いくら言い方を柔らかくしても、自分の意見を押しつけたらそれ  
は指図でしかない」

「……順序よく行くこうぜ。あの爺さん、どう思った？」

「だらしなさそう。女に」

「そういうことを聞きたいんじゃないんだ」

「分かってる……あの戦い方は、あたしにすごく合ってる。あたし  
も力はない。業師の戦闘術で補うのも限界を感じてた。あの技……  
魔術だっけ？ すごく欲しい」

「そうか。だったら」

「けどね、あたしも自分で編み出したい。へなちよこでもいいから、  
何年かかってもいいから、誰かに教わるんじゃないやなくて、自分で……」

「ルーシャ……気づいてるか？ 敵が強くなっていることに」

「え？」

「この世界についてからだけでも、レンダル、ヘイン、ビダー配下  
の手練たち……お前の手に負えない奴らばかりだった。空を飛んで  
た偽竜は論外だが……世界を渡るたびに、敵がどんどん強くなつて  
るんだよ」

「……待てないって言いたいのか？」

「世界が待ってくれない。時間かけてる余裕なんかないんだ。このままじゃ近いうちに……お前はオレの足手まといになる」

「そう。それならヴァン……あなたひとりで世界渡りを続けられればいいじゃない」

「無理を言うな。いつかの異界学者が言ってたろう、オレたちはふたり揃ってるから確定世界だけを渡っていけるって。ひとりで渡つたら不確定世界に飛ぶ危険が高い」

「危険だから嫌なの？ あたしね、もう疲れたの。誰か他のパートナーでも探せば」

「お前じゃなきゃ駄目なんだ！ 仮に他の誰かでも確定世界行きの世界渡りが可能だったとしても、オレはお前と一緒にがいい。一緒に……帰りたいんだよ……」

「……なにそれ。うまく口説いたと思ってる？」

「……」

「結論は少し先でいい？ なんかすごくむしゃくしゃしてるの。今すぐいい返事はできそうにない」

「……分かった。待ってる……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4708w/>

---

循環魔術の継承者 双極魔術第二集

2011年10月11日07時00分発行